

## 他者への想像力

湘南白百合学園中学校 3年

こばやし さき  
小林 咲葵

私は普通の中中学生です。勉強が大好きだからというわけではありませんが、友達と他愛もない話をして笑いあえる学校に行くことは楽しくて、たまに行きたくないと思うことはあっても、行くのが辛いと思ったことはありません。私は学校で過ごす当たり前の日常を楽しんでいる、普通の中中学生です。

二月下旬、新型コロナウイルスの流行による休校で、その日常が突然失われました。初めは長い春休みがきたという感覚で、断捨離をしたり、ゆっくり映画を観たり、普段はなかなかできなかったことをして楽しんでいました。しかし、春休みが終わるはずの四月になっても休校のまま、オンライン授業が始まりそれなりに忙しい日々には戻ったものの、ほとんど学校には行かれないまま夏休みになりました。オンラインで勉強ができ、先生や友達とも繋がることのできることは感謝しています。それでもやはり、学校に行きたい。私は対面で授業を受け、先生に質問をしたり友人の発言で気づきを得たい。試験前には友人の頑張る姿に刺激を受けて自分も頑張ろうという気持ちになりたい。くだらない話をして、笑い合いたい。皆私と同じ気持ちだろうと思っていました。しかし、オンライン授業について取り上げた新聞記事を読んで衝撃を受けました。オンライン授業になったことで出席率が上がったというのです。学校に行くことができない、いわゆる不登校の人が、オンライン授業になったことで、授業を受け、発言することもできるようになったといいます。また、彼らにとっては、学校へ行かないことが当たり前という日常は心地よいものだったというのです。不登校の人の存在は知っていましたが、親しい友人にはいなかった私は、彼らの中には、学校には行かれないが勉強はしたいと願い、学校へ行かれない、「普通ではない自分」に罪悪感を持って苦しんでいる人がいるのだということ、考えたこともありませんでした。

私は、学校へ行くことは「当たり前」だから、それを望む自分は「普通」だと思っていました。それは、裏を返せ

ば、学校へ行きたくない人を「普通ではない」と思っていたということです。「普通ではない」という言葉には、責めるような響きがあります。学校へ行かないことが「普通」となったことで、学校へ行きたくない人は「普通ではない」ことへの罪悪感から解放されたのです。人を「普通」「普通ではない」と分けることは、「普通ではない」と分類された人を傷つけます。不登校の人を責める気持ちは全くありませんでしたが、私は無意識のうちに「普通ではない」と思い、彼らを傷つけていたのです。私は自分を「普通」と称しましたが、それは単に「多数派」であったというだけでした。「多数派」であるという安心感から、自分のほうが「普通」なのだという奢りが生まれたのだと思います。「多数派」に属していれば、希望は叶いやすいです。「少数派」になると、希望が叶う可能性は低く、更に罪悪感まで感じなくてはなりません。これではあまりにも不公平ではないでしょうか。

「多数派」である私の願い、学校のある日常は徐々に戻ってきています。「少数派」である不登校の人達は、また元の状態に逆戻りしてしまうのでしょうか。オンライン授業になら出席できる人のために、学校での授業を配信して見られるようにし、学校で授業を受けるか自宅で配信を見るか選べるようにすることは、そう難しいことではないのではないのでしょうか。もちろん、全ての人の要望をきくことはできないでしょう。しかし、少数派だからといって切り捨てるのではなく、一人でも多くの人が過ごしやすいように、できることから始めることはとても大切だと思います。そしてそのためには、多数派である人が少数派の存在や、彼らの声に耳を傾ける必要があります。アメリカでブラックライブズマターの運動が当事者ではない白人の人々も参加して広まりました。このように、多数派が気づき、声を上げることで変えられることはあります。私は、自分が「多数派」であるときこそ、想像力を働かせ、人の痛みを感じ、自分にできることを考えられる人間になりたいと思います。